The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Through the Looking-Glass and What Alice Found There を関連性理論から読む
Author(s)	三原, 京
Citation	Osaka Literary Review. 1997, 35, p. 27-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Through the Looking-Glass and What Alice Found There を関連性理論から読む

三原　京

1. 序

Lewis Carroll が Alice を主人公にして書いた *Alice's Adventures in Wonderland* と *Through the Looking-Glass and What Alice Found There* は、意味論的・語用論的不規則性を数多く含んでいることで有名である。このため、この2冊の「アリス物語」(the Alice Books) は、これまでにも言語学的な分析が行われてきたが、Grice の協調の原理や Searle の発話行為論からの分析が主流であった (沖田 1987; Lakoff 1993; Matsumoto 1996)。そこで本論では、とりわけ言語学的に興味深い現象が多い *Through the Looking-Glass and What Alice Found There* をテクストとして選び、関連性理論からの分析を試みる。

本論で取り上げる言語事象は、次の3つである。

(1) "... why, what *are* those creatures, making honey down there? They can't be bees—nobody ever saw bees a mile off, you know—" and for some time she[=Alice] stood silent, watching one of them that was bustling about among the flowers, poking its proboscis into them, "just as if it was a regular bee," thought Alice.

However, this was anything but a regular bee: in fact, it was an elephant .... (III)

(2) "There's one other flower in the garden that can move about

like you," said the Rose. ....

"Is she like me?" Alice asked eagerly, for the thought crossed her mind, "There's another little girl in the garden, somewhere!" ....

...."She's one of the kind that has nine spikes, you know." .... "I was wondering *you* hadn't got some too. I thought it was the regular rule."

"She's coming!" cried the Larkspur. ....

Alice looked round eagerly and found that it was the Red Queen. (II)

(3) "Am I addressing the White Queen?" [said Alice.]

"Well, yes, if you call that a-dressing," the Queen said. "It isn't *my* notion of the thing, at all."

... "If your Majesty will only tell me the right way to begin, I'll do it as well as I can."

"But I don't want it done at all! .... I've been a-dressing myself for the last two hours."

It would have been all the better, as it seemed to Alice, if she had got some one else to dress her, she was so dreadfully untidy. (V)

(下線は筆者)

(1) は、proboscis が「(昆虫の)吻」と「(象の)鼻」という2つの意義をもつ多義語であることを利用した地口である。(2) は女王の王冠のぎざぎざを spike と表現し、結果的にメタファーになっているものである。そして(3)は、address (話しかける) を a-dress (a- (〜しながら) + dress (身じたくする)) ととり違えたために談話にずれが生じたケースである。これらの語用論的に興味深い言語事象を、2章では、稲木・沖田の説明を概観するとともに、従来の分析の主流であった Grice の協調の原理と、変形生成文法理論に影響を受けた研究者 Levin の理論からの説明を試みる。そして3章で関連性理論から分析する。

本論では、稲木・沖田が別々の説明を与えた3つの言語事象は、Grice や Levin の理論では十分説明できないが、関連性理論を用いると統一的な説明ができることを示す。

2. 従来の分析

2.1. 地口（pun）

(1) は proboscis という語の多義性を利用したものであるが、稲木（1994）では「蜜蜂の口と象の鼻が、細長くのびた形と、ものを吸い込む機能を持っていて、よく似ているためであろう」という説明しかなされていない。また地口というと Grice の様態の第2原則（Avoid ambiguity）との関連が指摘できるが、この場合は、この原則に違反したものとして簡単に片付けることはできない。まず第一に、普通地口はユーモアを出すものなのに、(1) は鏡の国独特の奇妙な雰囲気を作り出している。第二に、この地口はあらかじめ意図されたものではなく、Alice 自身もこの語の指示物が何なのかわからなかった。Alice にしてみれば精一杯の解釈をしたのであり、“Avoid ambiguity” に違反するつもりなど全くなかったのである。したがって、(1) は偶然地口になったケースであり、Grice の様態の第2原則以上の説明が必要な特殊例と言える。

2.2. メタファー

沖田（1992）は、(2) の場面を「視点の相違」という概念で説明している。花の視点は Alice の視点とは異なるので、(2) に見られるような表現が使われているのだ、というのである。この場合、spike ではないが spike と類似性をもっているもの（王冠のぎざぎざ）を spike と言っているので、Grice の質の原則（Try to make your contribution one that is true）と無関係ではない。しかし花にしてみれば、自分が本当だと思ったことを言ったのであり、メタファーを使おうなどという気もなかった。したがって、一般的なウソやメタファーと同じように質の原則から説明するのは不適切である。

また、この場面には一見、Levin (1971) の "nonrecoverable deletion"[1] という考えが適用できるように見える。Levin は (4a)を (4b) のように補っても何の変哲もないのに対して、(5a) を (5b) のように補うと理解の助けになるため、(4) を "recoverable deletion"、(5) を "nonrecoverable deletion" と呼んだ。尚、(4) は D.H. Lawrence の文章、(5) は Emily Dickinson の詩である。

(4) a. The renegade hates life itself. He wants the death of life. So these many "reformers" and "idealists" who glorify the savages in America. They are death-birds, life-haters. Renegades.

b. The renegade hates life itself. He wants the death of life. So these many "reformers" and "idealists who glorify the savages in America [want the death of life]. They are death-birds. [They are] life-haters. [They are] renegades.

(Levin 1971: 52)

(5) a. When Etna basks and purrs,
Naples is more afraid
Than when she shows her Garnet Tooth;
Security is loud.

b. When Etna basks and purrs,
Naples is more afraid
Than when she shows her Garnet Tooth [and roars];
[Because / As / Since / For] Security is loud [not soft / not quiet].

(Levin 1971: 42-45)

芝原 (1995) は、これを発展させて、(6a) の文章 (K. Mansfield の *The Stranger* の冒頭部分) は、下線部の語の指示物を (6b) のように正確に読み取らない限り理解できない、と述べた。

(6) a. It seemed to the little crowd on the wharf that (a) she was never going to move again. There (b) she lay, immense, motionless on the grey crinkled water, a loop of smoke above (c) her, an immense flock of gulls screaming and diving after the galley droppings at the stern. You could just see little couple parading—(d) little flies walking up and down (e) the dish on (f) the grey crinkled tablecloth.

b. (a)〜(c) いずれも同じ「一隻の船」
(d) ハエのように小さく見える船上の人々
(e) 船のこと（船体を皿に見立てたもの）
(f) 海面のこと（波立つ海面を皺のよったテーブルクロスに見立てたもの）

（芝原 1995: 318-319）

この考えは、ある程度までなら (2) に適用することもできる。(2) も spike が何を指すのかわからないと理解できない。しかし (6) の場合は、このままの状態で、それぞれの語の指示物を読み取らなければならないのに対し、(2) は Red Queen の登場で一気に謎が解ける。また、(6) はこのままの状態で読み取ることが可能だが、(2) の場合は花の言う spike が Alice にないのだから、Red Queen が現われる前にこの語の指示物を考え出すのは、ほとんど不可能でもある。したがって、この Levin の理論も (2) の説明には十分ではない。

2.3. 談話のずれ

(3) では、 Alice の使った address（話しかける）という語が White Queen に a-dress (a（〜しながら）＋ dress（身じたくする）) と解釈されたために、談話にずれが生じている。この場合、誤解を招くおそれのない "Are you the White Queen?" という表現を使わなかった Alice は、Grice の協調の原理に違反していると考えるべきだろうか。

稲木・沖田（1994）で述べられているように、いやしくも女王陛下に話しかけるのであるから、“Are you the White Queen?” では直接的すぎて失礼である。一方 White Queen の方も、自分の身なりを整えるのにさんざん苦労したあげく、ショールを風に飛ばされて、それを追いかけてきた結果、Alice に出会ったのであるから、address を a-dress と解釈したのも仕方がないと言える。したがって、この例も Grice の協調の原理以上のもので説明する必要がある。

3. 関連性

Grice の協調の原理の１つに関与性の原則（Be relevant）があるが、Sperber and Wilson（1986）は、この原則が他の原則に優越するという考えを発展させ、関連性理論を提案した。

(7) ... other things being equal, an assumption with greater contextual effects is more relevant; and, other things being equal, an assumption requiring a smaller processing effort is more relevant.

(Sperber and Wilson 1986: 125)

これによると、関連性（relevance）をもつためには、処理労力が少ないか、文脈効果が大きくなければならない。

(1)-(3) の処理労力は、極めて大きい。(3) は address と a-dress ではスペリングが違うので、読者の処理労力は比較的少なくてすむが、そのような視覚の助けのない (1)、(2) の処理労力はかなり大きい。加えて (3) の場合は、読者が第三者の立場で Alice と White Queen の会話を冷静に分析できるのに対し、(1) と (2) は、読者に Alice の 目を通して考えさせるような設定になっているため、その処理は困難を極める。

しかし、(1)-(3) はいずれも、処理した後の文脈効果もかなり大きいと言える。(1) の場合、読者の想定（assumption）は、Alice 同様「やってい

ることから考えると、蜜蜂だが…」というものである。ところが、その後、実際には蜜蜂ではなく象であることが判明すると、Alice 同様驚愕する。Sperber and Wilson のいう矛盾（contradiction）効果である。(2) でも、読者の想定は Alice と同じで「spike をもっているのは、鏡の国の住民ではなく Alice のような女の子だろう」というものである。それが Red Queen の登場によって、spike の指示物が判明すると同時に、最初にたてた想定が矛盾となって大きな効果をもたらす。また (3) の場合も、読者が第三者の立場にいるために Alice と同じ想定はたてないという違いはあるものの、基本的なメカニズムは (1)、(2) と同じである。読者の世界では、ある人が A と発話したのに相手がそれをBと解釈して談話がずれると、どちらか一方がそれに気付き、「Aのつもりだったのですが…」「Bと思ったんですが、A だったんですか」という具合に、たとえ一時的であれ、A の方向へ談話が流れるのが普通である。ところが (3) では、address が a-dress と間違って解釈されたために談話にずれが生じたにもかかわらず、Alice がこれに気付いた後も address の方には一切話が戻らず、間違った解釈であるはずの a-dress の方へどんどん話が流れていく。ここでも矛盾効果が現われるのである。

つまり (1)-(3) は、大きな文脈効果をもっているために、大きな処理労力がかかることが許されているのだと言える。逆に言えば、処理労力が大きいために読者を考え込ませ、読者が理解した後には大きな文脈効果をもたらしているのだと言えよう。

以上の考察から、(1)-(3) のような *Through the Looking-Glass and What Alice Found There* 特有の語用論的に興味深い言語事象は、すべて処理労力はかなり大きいが、それを補って余りあるほど大きな文脈効果をもっていると言える。その文脈効果は「矛盾」であり、(1)、(2) のように指示物不明の場合は指示物が判明した時点で、(3) のように談話がずれる場合は対話者の一方がずれに気付いた後でその効果が一気に現われる。したがって、稲木・沖田が別々の説明を与えた3つの言語事象、Grice や Levin の理論

では不十分だった言語事象は、関連性理論を用いると統一的に説明できる。

4. 結　語

以上本論では、*Through the Looking-Glass and What Alice Found There* に見られる地口、メタファー、談話のずれを、2章では従来の理論から考え、3章で関連性理論から考察した。本論の中心的なねらいは、このような語用論的に興味深い言語事象はすべて「矛盾」という文脈効果をもっていることを示すことである。残された課題としては、ここで取り上げなかった言語学的に不規則な言語事象が、同じように説明できるかどうかということである。とりわけ鞄語 (portmanteau word)[2] や語の逆成[3] は、関連性理論の枠組みには入らないと思われる。これらについては、新たに考察する必要があるだろう。

注

1 Deletion（削除）とは、原始基本変形の1つで、文内のある要素を取り去る操作のこと。削除は、削除される要素が復元可能でなければならないという「復元可能性条件 (recoverability condition)」に従う。

（中村・金子・菊地 1989: 223）

2 鞄語 (portmanteau word) は、*Through the Looking-Glass and What Alice Found There* I 章の "Jabberwocky" という詩に出てくる Carroll が作った新語のこと。'slithy' という語が 'lithe and slimy' を意味するという具合に、1つの語に2つの意味が詰め込まれている。

3 これは、*Alice's Adventures in Wonderland* に見られる言語事象で、Mock Turtle がその例である。これは mock turtle soup から逆成されてできた。turtle soup は、本当は green turtle を材料に作られるのであるが、高価なので代わりに子牛の膝肉またはすね肉が使われることもあったようで、これを mock turtle soup と呼ぶ。この mock turtle soup の修辞関係は、mock (turtle soup) であるが、これを (mock turtle) soup とひねって「ニセウミガメのスープ」とし、逆成語 Mock Turtle が生まれた。J. Tenniel は Mock Turtle を、牛の頭と尾をもった亀として描いている。詳しくは、稲木・沖田 (1991: 42-43) 参照。

主要参考文献

Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation," in Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* 3: *Speech Acts*, 41-58, New York: Academic Press.

稲木昭子 (1994)「鏡の国の言葉遊び－昆虫の場合－」『追手門学院大学英文学会論集』第3号, 73-83.

稲木昭子・沖田知子 (1991)『アリスの英語－不思議の国のことば学－』研究社出版.

稲木昭子・沖田知子 (1994)『アリスの英語2－鏡の国のことば学－』研究社出版.

Lakoff, R. T. (1993) "Lewis Carroll: Subversive Pragmaticist," *Pragmatics* 3:4, 367-385.

Levin, S. R. (1971) "The Analysis of Compression in Poetry," *Foundations of Language* 7, 38-55.

Matsumoto, S. (1996) "Discourse in Lewis Carroll's English"『英語英米文学研究』第24号, 37-47, 龍谷大学大学院英語英米文学会.

中村捷・金子義明・菊地朗 (1989)『生成文法の基礎－原理とパラミターのアプローチ－』研究社出版.

沖田知子 (1987)「アリスの談話」『大阪大学医療技術短期大学部研究紀要』第19輯、1-35.

沖田知子 (1992)「アリスと視点－生きた花の庭の場合－」『大阪大学医療技術短期大学部研究紀要』第24輯, 1-23.

Papafragou, A. (1995) "Metonymy and Relevance," *UCL Working Papers in Linguistics* 7, 141-175.

芝原宏治 (1995)『錯誤の意味論』海鳴社.

Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.

テクスト

Gardner, M. (ed.) (1970) *The Annotated Alice*, Penguin Books.